第 19 回筑紫地区人権・同和教育研究大会報告

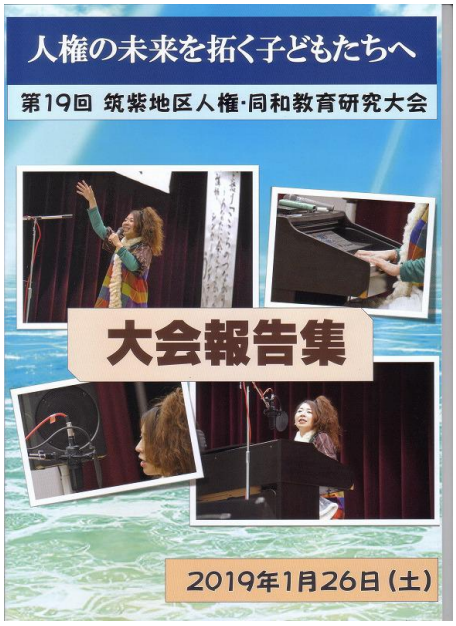
第 19 回筑紫地区人権・同和教育研究大会が 2019 年 1 月 26 日（土）10 時から筑紫野市文化会館ほかで行われました。テーマ は

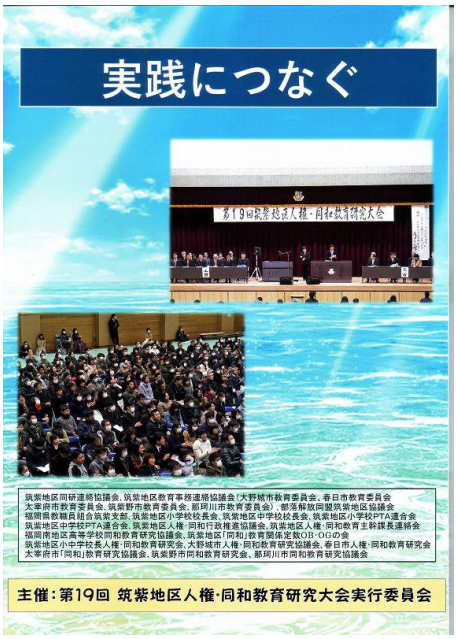
「人権の未来を拓く子どもたちへ」

・部落差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう！
・学校、家庭、地域のくらしの中から、豊かな人権文化を育むための具体的な取り組みを展開しよう！

その中で 10 時～12 時 30 分の第 4 分科会でぼちぼちの会会長の木村が講演を担当しました。分科会の筑紫野市文化会館大ホールは教職員や行政関係者保護者など焼く３８０名の参加者がありました。報告書ができましたので掲示します。

4	不登校を考える	木村 素也 さん （「ぼちぼちの会」会長）	筑紫野市文化会館（大ホール）
	【 不登校支援の輪をつなげよう　～不登校の何が問題か～ 】 2017年度の福岡県小中学校の不登校生が5,641人。この数を見てどう思いますか。学校に行くのが普通の子どもで、学校に行けない子どもは、その家庭に問題があると間違った考え方をしていませんか？不登校の何が問題が、みんなで考えましょう。		





分科会4　不登校を考える

不登校支援の輪をつなげよう

～ 不登校の何が問題か ～

講師紹介

木村　素也さん

３８年間、福岡市立中学校の教員として勤務。福岡市教育委員会事務局（主任指導主事）、１６年間福岡市立中学校の管理職（教頭・校長）として学校運営にかかわる。退職後福岡市こども総合センター相談員。

2000 年より「不登校生の保護者の会」を立ち上げ不登校生の支援を行う。現在「ぼちぼちの会」会長として各地の保護者の会と連携して不登校生・保護者の支援活動を行っている。

ぼちぼちの会ＨＰ　http://bochibochinokai.com

この分科会のねらい

文部科学省の調査によると、2017 年度全国の小・中学校合わせた不登校の児童生徒数は、14 万4千人にのぼり、5年連続で増加しています。「不登校は問題行動で、本人や保護者など家庭に課題がある」という見方や考え方を持っていないでしょうか。

この分科会では、「不登校の何が問題なのか」「不登校支援の輪をつなげ、広げるための具体的な行動」について考えることをねらいとします。

また、今回の研究大会のキーワードである「実践につなぐ」につながるように、木村先生からは、具体的に明日から、学校、保護者、行政が何をすべきかを示唆して頂きます。参加者がそれぞれの立場で、どう行動すれば不登校生の支援ができるか、その視点や方向性を考えましょう。

1. 不登校をどう捉えるか

５,６４１人

福岡県の不登校児童生徒数（小・中学校）は、過去最高の人数となる。

最近の不登校に関する国や行政の状況

○文科省通知　2003.5.16

「心の問題」としてのみ捉えるのではなく、「進路の問題」。

不登校については、特定の子どもに特有の問題があることによって起こることではなく、どの子どもにも起こりうることとしてとらえる。

○文科省通知　2016.9.14

「問題行動」と判断してはならない。

「不登校の期間は休養や自分を見つめ直すなど積極的な意味を持つことがある」としたうえで、不登校の子への支援は、学校を休む子どもが悪いという「根強い偏見を払拭することが重要」

「不登校支援の目的は学校の復帰のみにとらわれることなく、社会的自立を目指す」

○教育機会確保法　2016.12 成立

無理に学校に行く必要はない。

「休養の必要性」

「不登校の子どもたちが安心して学べる環境を学校以外の場所でつくりあげる。」

「学校以外の教育の場の確保」・・・フリースクール

「多様な教育の選択肢の保証」

- 不登校の原因を突き止めても、有効な「支援」に繋がるとは限らない。
- 本人でさえ「不登校」の原因がわからないことがある。
- 「原因を解明する」のではなく、「不登校期間の長い時間をどう過ごすか」を本人に考えさせ、今やれることをやっていくことが大切である。
- 将来のために本人がやれることを自分で考え、自分の意志で活動させる。
- 周囲の大人は、今、何ができるかを本人と一緒に考える。

2. 不登校によって生じる不利益は何で補うのか

不登校のまま、何も手立てを取らないと…

1　勉強の遅れ
2　他人と接する機会の減少
3　自己肯定感の低下
4　「不登校」のレッテル

1　勉強の遅れ（学力保障ができない。）

- 学校以外の教育の場を活用する。
  （塾　家庭教師　フリースクール　適応指導教室
  ステップルーム　通級指導教室　学習支援センター　など）

2　他人と接する機会が減少する。

- 集団生活や他とコミュニケーションをとることなど、これまで出来ていたことが出来なくなる。出来ることは何かを考える。出来ないことはしない。
- 発達に課題があれば必要な支援をする。（医療、教育、環境）
- ＳＣ（ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ）ＳＳＷ（ｽｸｰﾙｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ）を活用する。

3　自己肯定感が低下する。

- 本人は「学校に行けないこと」を悪いことだと思っているので、その罪悪感から解放する。
- 「学校に行くこと」が不登校解消の前提にならないことを理解させる。

4　「不登校」のレッテルをはってしまう。

- 不登校を正しく理解する。
- 進路の可能性を広げる。
  （通信制や定時制、単位制高校への進学など）
- 保護者は、「親の会」などで他とつながりを持つ。情報を交換したり悩みを共有したりして、孤立しないようにする。

3. 教師の役割は指導者でなく・・・

1　努力の過程を認めず結果だけを求めるなど、学校や教師に寛容さがなくなってきている。

2　「学校に来ていないこと」を認めるのは、「特別扱い」ではなく、「配慮」である。

3　学校の教師の言動を、学級の子どもたちはまねをする。教師の他を排除した見方を、子どもたちもしてしまう。

4　困り感のない子どもはいない。寄り添う心を常にもつ。

5　学級で一番厳しい子どもに、教師のエネルギーを入れる。

支援者である。

4.「学校に行く」意義を考える

「なぜ学校に行くのか。」「何のために勉強するのか」を本人と一緒に考えてみよう。

1　本人は今を生きることで、精一杯。明日、学校に行くことができるか不安。
2　将来を見通すことが出来ない。（経験値がない。）
3　「学校に行きなさい」と大人が言っても、なぜ学校に行かなければならないか分からない。

「不登校」の児童生徒にとって
学校に行くデメリット…孤立やいじめなどのトラブルが起きる。
学校に行かないメリット…休養や自分を見つめ直す時間が持てる。

・不登校期間をどう過ごすかを考える
・今やれることをやっていく。
・将来のために本人がやれることを自分で考え、自分の意志で活動する。

※周囲の大人は、今、何ができるかを本人と一緒に考える。

○参加者の感想

・今まで不登校の子どもはどこか心が弱い子なんだと決めつけているところがあると自分自身反省しました。学級担任として、クラスの中で一番困っている生徒の配慮を忘れずに、本人にとって居心地の良い環境を家庭や学校で協力して作っていけたらいいなと思いました。
（春日市　中学校教職員）

・「不登校はいけない」というレッテルを貼ってはいけないことは、知っていましたが、フリースクールもまだ少ないなかで、どうすればよいか疑問を抱いていました。本日の講演を拝聴してその疑問が氷解しました。個の対応があってのことなので簡単に解決することはできませんが、不登校のお子さんに悩む保護者の方に寄り添え、共に悩める自信が生まれてきました。
（春日市　保護者）

・私の学級の不登校の子どもと照らし合わせながら拝聴しました。現在、小学校の３年生ですが担外、特学の先生方の協力をいただきながら、教室に入れませんが、毎朝、登校できるようになりました。あらゆる人的資源などを活用しながら、保護者の不安を少しでも解消するようにすることで子どもの表情が穏やかになっていったような気がします。今回、私自身も、心が解放され「今のままでいいんだよ」と子どもに言える自信を頂きました。
（太宰府市 小学校教職員）

・子どもの姿から学校や教職員の課題を明らかにすることを、「同和教育」は問いかけてきたと思う。今、学校現場に目を向けると学校のシステムに子どもをあわせようとしているようにしか見えない。教職員が子どもをどう見ているかは大きい。その見方を間違えないようにしたい。そのためにも子どもとの関わりを大切にしていきたい。
（太宰府市　中学校教職員）

・行政職員として生活保護、ケースワーカーで不登校家庭に関わったことがありますが、その時の経験を思い出しながら聞いていました。本人が評価の対象となり得る課題を積極的に引き出すというお話が印象に残りました。
（太宰府市　行政職員）

・保護者としてまた、保育士として考えさせられる内容でした。学校に行かなくてはいけない、行った方がよいという考えをがらりと変えさせられました。その子が今できること、それを一緒に見つけ、その子にあわせた支援をしていくことが大切だと感じました。
（大野城市　保育所教職員）

・自分の受け持っているクラスにも、不登校傾向の子どもがおり、いま、その対応に悩んでいるところでした。私自身が不登校に関する情報が不足しているので、今日の講演内容はとても勉強になりました。
（大野城市　小学校教職員）

・自分の学校に不登校児童がいるため大変勉強になりました。自分のしていたことが子どもにプレッシャーを与えていたのだなとわかりました。今日、学んだことをこれからの支援にいかしていきたいです。
（筑紫野市　小学校教職員）

・大変、勉強になるお話をお聞きすることができ、有意義な時間を過ごすことができました。私の学級にひとり、不登校の子が在籍しており、その児童に対してどのような支援をすればよいか知ることができました。
先生のお話の中で、服を脱ぎ捨てて逃げたことや、失敗→自信喪失というお話がありましたが、私の学級の児童も全く同じことをしたことがあり、自信がないと言うことを聞き、反省しております。月曜日から今日の学びを実践し、児童と向き合っていこうと思います。
（筑紫野市　小学校教職員）

・今受け持っている子どもに、不登校の子がおり、どう声かけをしていくべきなのか、保護者の方とどこを目指して協力していくべきなのか悩んでおりました。不登校自体を問題として解決するのではなく、そのことによって生じる不利益を解消してあげることで子どもの自尊感情を高めてあげることが大切なことだと気づくことができました。大人と子どもの感覚の違いを押しつけるのではなくしっかりと会話しながら、子どもと保護者の方と向き合いたいと思いました。学びの多い時間となりありがとうございました。
（筑紫野市　小学校教職員）

・学校に不登校の生徒が数名おり、どんな言葉をかけたらいいのか、また、どうしたら会ってくれるのか、日々考え、悩みながらご家庭に関わっています。日頃、悩んでいる子どもの気持ちが少し楽になると思えるお話があり、今後にいかしていきたいと思います。
（那珂川市　小学校教職員）

・社会全体がストレス社会となっていて、そのしわ寄せがきているのではと思いました。最近は敏感な子どもが増えているように思います。以前と比べると学校に行けない子どもが本当に増えています。今日は改めて知る内容もあり、理解することができました。我が子が精神的にお腹が痛いときに、無理に行かせなくてよかったと思います。心の成長が見られました。
（那珂川市　保護者）

分科会を終えて

この分科会を担当することで、木村先生と何度も打ち合わせやお話をお聞きして、今までの自分がいかに勉強不足かを痛感しました。また、「不登校」の児童生徒に対しての取り組みが十分であったかと反省しました。

さて、「不登校の何が問題か。」このキーワードを聞いたときに、皆さんは何を思いましたか。「学校に出せない保護者が悪い。」「本人の怠学だ。」と家庭や本人のせいにしていたことが多かったと思います。

木村先生は、「不登校自体を問題行動と判断してはならない。学校に来るか来ないかは、本人の判断にゆだねてよい。」「学校に来ないからと放置するのではなく、保護者や教員は本人に必要な情報や環境を提供しなければならない。」「個に応じた具体的な働きかけが大切だ。」と話されました。また、「子育てにも、教育にも失敗はない。自分の思ったとおりになることが成功で、思ったとおりにならないことが失敗ではありません。自分なりに子育てや教育に取り組み続けることが大切です。」とも話されました。

「ぽちぽちの会」のことを知り、その活動に本当に感心させられました。「不登校」の子どものことで悩んで、どうしてよいかわからなかったら、ぜひ「ぽちぽちの会」のＨＰを見てください。参考になる情報がたくさんあります。その中からみなさんが、自分に合う情報を活用して頂けばよいと思います。